

竹田薬師院家について

安井 広 迪

竹田家は、室町時代から安土桃山時代にかけて隆盛を誇った医学の家系である。この家系については、『寛政重修諸家譜』などに記載もあり、またいくつかの論文によって、その支流である萩竹田家や、紀州竹田家の事蹟も明らかになっている。筆者は、もう一つの支流として重要な位置を占めていると思われる堺の竹田薬師院家について、調査を行ったので報告する。

黒川道祐は、その著『本朝医考』の中で、「薬師寺円俊高定和尚」と題してその伝を載せている。これは、月舟寿桂〔幻雲と号す。天文二年（一五三三）卒〕の『幻雲文集』から節略して引用したものである。

これによると、竹田薬師院円俊高定は、竹田昭慶（一四一五～一五〇二）の第二子で、最初般若寺、次いで西大寺、のちに宝生護国院で修業した僧であり、密を得意としたら

しい。かたわら医をよくし、後土御門、後柏原両天皇の治療を行って功があったという。

一方、『堺市史』は「泉州堺医家竹田薬師院由緒書」について記しており、これによって竹田薬師院家代々の事蹟を知ることができる。

この「由緒書」によれば、円俊高定は堯慶という人の子となつている。堯慶については、当時のいくつかの史料に登場し、実在の人物であることは確かであるが、円俊高定の父とする根拠が他に見当たらず、いささか信憑性に欠ける。

円俊高定は、明応元年（一四九二）三月に後土御門天皇の病気を治して法眼になり、また文亀三年（一五〇三）に後柏原天皇の治療に際して効あり、法印に叙せられ、この時に薬師院の院号を賜っている。竹田薬師院家の始まりである。なお、彼が当時の史料の中で薬師寺とも呼ばれるのは、この院号の由である。

円俊の生没年は明らかではない。『幻雲文集』の著者月舟は一五三三年に没しており、円俊は、ここに記載された時にすでに七五才になっていたという事実から推察する

と、相当の長寿を保ったと思われる。

円俊に実子があったかどうかは明らかではないが、彼の後は定快という人が継いでいる。この人は天文の始めに法橋となり、同一〇年（一五四一）に法眼、次いで弘治元年（二五五五）に後奈良天皇御不豫の際に菓を奉って効あり、法印に叙せられている。

定快の後は円礎定信が継ぐ。この人は文禄三年（二五九四）に法印に叙せられたことが判明している。彼は秀吉に重んじられ、医流永統の為に堺の舳松町（へつまつ）に屋敷地を拝領し、かつ諸役御免の朱印を下されたという。

また、彼は利休の茶道の師匠の一人であった北向道陳の娘を娶り、男子のなかった道陳が亡くなると、その遺産を受け継いだ。『天王寺屋会記』に北向円礎の名で登場するのがこの人である。

円礎定信の後は、円礎隆品が継ぐ。隆品は家康に召されて関東に移り、千石を賜った。家方の牛黄清心円を献上し、感状をもらったとも記されている。彼は元和九年（一六三三）に法眼に叙せられ、晩年は堺に戻って老を養った。

なお、この時代に竹田円政なる人物があり、やはり竹田

薬師院の院主であったという記載が『明暗双双集』に見られる。彼は沢庵宗彭に参し、石林と称し、歌道にも通じていた。寛永二年（一六二五）に八一才で没したという。この人が、先の円礎定信や隆品とどのような関係にあるかは、明らかでない。

さて、円礎隆品の後は円礎定源が継ぐ。彼は寛永十一年（一六三四）に家光の京都上洛に際して召され、この時に法眼となっている。

その後も、竹田薬師院家は堺にあつて医家として活動し、数代を経たが、その間の経緯はあまり良くわかっていない。

数代後に、外から薬師院家に入った人（弟子であつたらしい）が、円礎の号を受け継ぎ元文元年（二七三六）に法橋に叙せられたという記録を最後に、竹田薬師院家の消息は不明となる。

（北里研究所附属東洋医学総合研究所）